

## 学員と俳句

中央俳句会事務局長

ながめま  
長沼ひろ志

学員会が、事業の一環として『学員時報』に「中央俳壇」を設け、俳句を通じて学員の学員会活動への参加を図ったのが平成五年、それに触発されて、俳句同好会「中央俳句会」が発足したのがその翌年のことである。

平成四年春、時の学員会会長堂野達也先生から、「学員会の事業に文化的なものを取り入れたらどうか」との諮問を受けた市橋千鶴子学員会副会長が、折からの俳句ブームに着目し、時報の紙面に俳句欄を設け、学員に限らず学員や学生のファミリーからの俳句を掲載することを提案した。応募俳句の選者には、当然のことながら、学員の俳人を当てることとした。

当時学員の中には、穴井太、石原八束、宇都木水晶花、加古宗也、関口謙太、鷹羽狩行、千代田葛彦、松尾隆信、湊楊一郎、和知喜八といった方々が俳人として名を連ねられていたが（日外アソシエーツ『詩歌人名事典』平成五年版）、最初に就任を依頼した石原八束さん（昭和十八年法卒）から快諾が得られ、初代の選者に就任していた

霜柱はがねのこゑをはなちけり  
の句碑を建立したが、石原さんは、この句碑の完成を見ずに、同年七月十六日逝去された。東大の三四郎池にあるへ銀杏ちるまっただ中に法科あり 山口青郵と並んで、母校の庭に立つ数少ない句碑として、当時話題になったことである。



石原さんは、俳壇の重鎮、俳誌『秋』の主筆、詩人三好達治、俳人飯田蛇笏研究の第一人者として多忙を極められていた中を、「母校の依頼ということであれば」と時報の選者と俳句会の顧問就任を快くご承引くださり、俳句欄の名称も「白門」などとせず、「中央」の名を冠するよう提案されるなど、熱烈な母校愛の持ち主であられた。

学員会は、石原さんの俳人として

とところで、中央俳句会は、市橋千鶴子さん（俳号・千翔、「河」当月集同人）を会長とする、会員数約百人の、学員会とは直接の関係のない任意の俳句同好会として、月例の句会と年数回の吟行会を催しているが、会員の中には、俳誌「悠」の主宰水見壽男副会長をはじめ、各結社の主

要同人が多数含まれている。その中央俳句会は、学員会の委嘱を受けて、全学員とその家族を対象に『中央俳壇年刊合同句集』の刊行を行っており、創刊の平成十一年度は百三十人、十二年度は百七十三人、十三年度は百八十七人と、次第に出詠者が増えてきていることは、学員の中に俳句愛好者が大勢いることの証左で、頼もしい限りである。

これも特筆に値することであるが、最近、支部単位での俳句会が増えてきていることである。今年俳句会創立五十周年を迎えた南甲俱樂部支部と、古い歴史を持つ京都支部は別格として、杉並区、練馬区、文京区の三支部に俳句会が誕生している（平成十二年度『支部活動報告書』より）。これらの支部は『年刊合同句集』にも揃って出詠されており、今後支部単位の俳句会が活発化すれば、他大・学校友会に類を見ない、優れた合同句集になるものと期待される。（本名・末廣。昭和28年法学部卒）